都道府県番号	１１
都道府県名	埼 玉 県

【 ① □ ② ☑ ③ □ 】

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	鴻巣市立鴻巣中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	7	7	7	3	２４	４２（加配３を含む）
生徒数	２４３	２４６	２５２	１２	７５３	

Ⅱ　研究の概要

（１）研究主題

個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善
～少人数指導による数学科・英語科の取り組みを中心として～

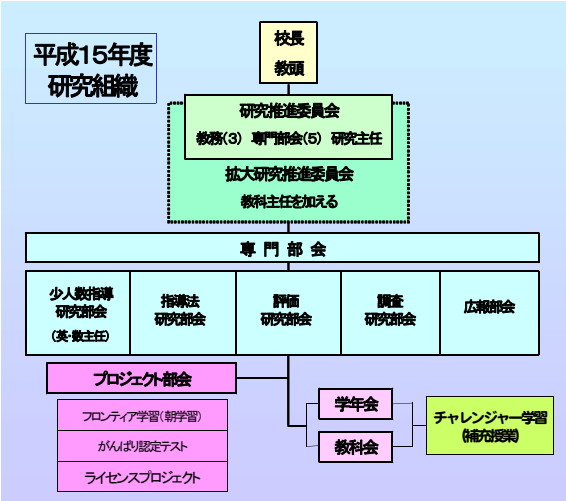
（２）研究主題設定の趣旨

本校では、「特色ある学校づくり」を学校経営の柱として、「一人一人の個を伸ばすこと」を重視して全国的にも早い段階で、数学科と英語科で「少人数指導における習熟度別学習」を開始した。その先駆的で自主的な研究実績が認められ、、平成１４～１６年度文部科学省事業・埼玉県教育委員会指定「学力向上フロンティアスクール指定校」となっている。これまでに実質３年間、全校体制で本格的に研究推進を行ってきた。

Ⅲ　研究の概要

（１）研究推進体制の工夫

校門をくぐると、「学力向上フロンティアスクール指定校」の大看板が目に入る。
地域社会に積極的に情報を伝えるとともに関心・注目を高め、地域の先進校、フロンティア校としての役割を担いたいと、全校あげて学力向上の取り組みを実践している。
研究の実践は研究推進委員会が牽引してきたが、各専門部会及びプロジェクト部会が実践的な取り組みを進めた。
また、補充授業の開催など学年会が研究の推進に大きく貢献している。



（２）研究の実際

「鴻中・学力向上レインボー作戦」（７つの挑戦）

図は、本校の３年間の研究の結果、本校が到達した「確かな学力の向上」の７つの挑戦を分かりやすくシンボル化したものである。
本校では学力のみを伸ばすのではなく、知育・徳育・体育のバランスのよい成長＝「人間教育」を基本として、学力向上に向けた実践活動を進めている。

①「少人数指導における習熟度別学習」
②「全教科の研究」
③「フロンテイア学習（朝学習）」
④「がんばり認定テスト（がんばり認定賞）」
⑤「チャレンジャー学習（補充授業）」
⑥「ライセンス　プロジェクト」
⑦「人間教育」

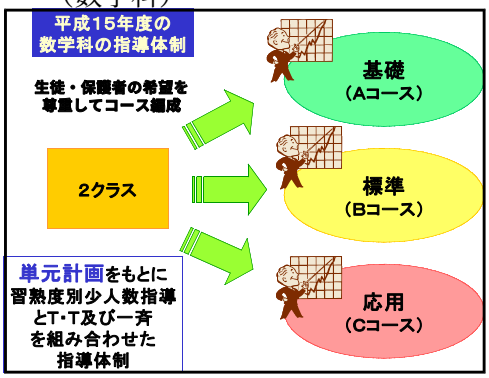
中心課題：**数学科・英語科の「少人数指導における習熟度別学習」**

数学科、英語科の教科の特性を生かして、下記の学習形態を「鴻中方式」と位置づけ、さらに研究を深めている。

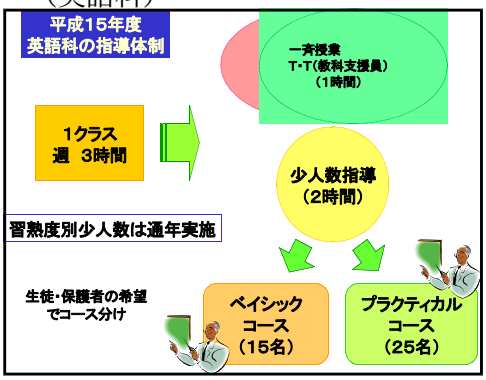
ア）学習形態

学習形態については、数学科は、これまでの研究や定期テスト等の分析から、実態として生徒の学力に３つの山があることがわかった。そこでより効果をあげるために生徒の習熟度の実態にあわせ、２学級を３つの習熟度別コースに分けることとした。また、当初英語科も全く同じ３コースで実施を始めたが、研究を進める中で、より人数をしぼりコミュニュケーション機会を増やすこと、また数学ほど習熟度に差がないことから､英語科では１学級を２つのコースに分けている。以下にコースのモデルを示す。

（数学科）



（英語科）



イ）コース選択について

生徒が保護者と相談して自分にふさわしいコース選択をする。原則として、希望を尊重する。当初は、異なったレベルのコースを選ぶ生徒もいたが、自己評価力の高まりとともに、ほとんどの生徒が自分の習熟度に応じたコースを選べるようになった。

ウ）年間指導計画における「少人数指導における習熟度別学習」の取り扱い

数学科　年間を通して全ての授業で「少人数指導における習熟度別学習」を実施することが有効とは考えていない。この学習の有効性は単元による。図形や関数の単元によっては、一斉授業の中において、多様な意見の交換の中から、生徒同士の思考を深めあったり、お互いが切磋琢磨するなどの助け合い学習、相互を認めあう学習も必要である。そこで、教師の持ち時間数や余裕教室等を勘案し、単元計画をもとに習熟度別学習を実践している。

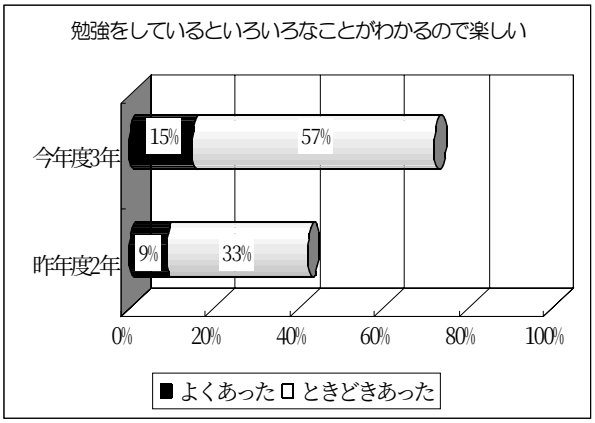
英語科　文法や単語等の難易度に準じて教科書が編集されているので、数学科ほどに単元ごとに指導の内容が異なることはない。そこで、英語科では、一斉・ＴＴ・少人数指導における習熟度学習の機械的なパターンで授業を進めている。現在、通年で週３時間中２時間を習熟度別学習にあてている。

エ）広報活動
「少人数指導における習熟度別学習」の実施にあたっては、フロンテイア集会（生徒集会）や保護者会での説明、通知文、学校通信、フロンテイア通信などで「少人数による習熟度別学習」に対する誤解が生じないよう説明し、生徒や保護者に学習効果等の情報を伝えている。また、ホームページにおいても研究成果を含め広報活動を行っている。

（３）研究の成果と課題
①研究の成果

ア）学習意欲の向上

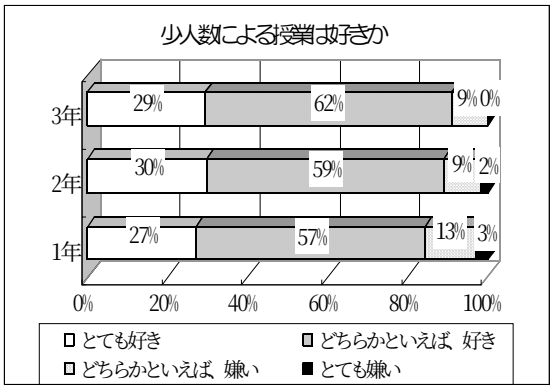
本校の特色である「少人数指導における習熟度別学習」については、３年間の実践の結果、すでに指導体制として定着したと言える。生徒もこの学習スタイルを積極的に受け入れ、学習意欲の向上とともに学習効果もあがっている。
また、全教科を通して、生徒はわかる喜びを感じながら真剣に学習に取り組む姿勢が見られ、予想以上に学習意欲の望ましい向上が図られた。



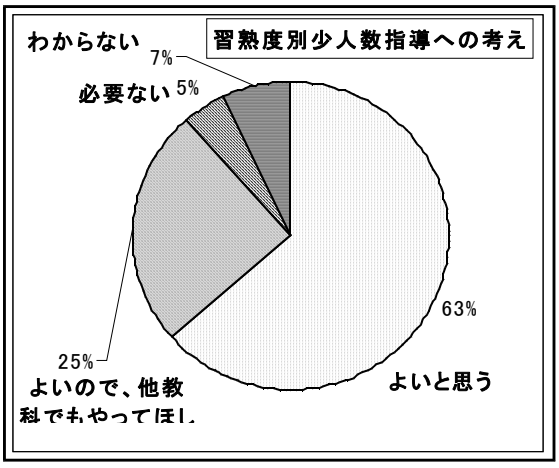
イ）学力の向上
校内定期テスト、がんばり認定テスト（本校独自の基礎力の定着を図る学習テスト）、英検、数検の合格状況、全国規模の民間テストの結果を総合に考察すると生徒の学力向上が確認できた。

ウ）生徒と教員との信頼関係の深化

「少人数指導による習熟度別学習」を実践してから、教員が一人一人の生徒に関わる機会と時間が大幅に増えた。その結果、生徒と教員との信頼関係が深まり、真剣な中にもなごやかな学習が成立している。一斉授業では、手を上げない生徒も、間違いを恐れず伸び伸びと挙手するなど、楽しげな授業が展開している。



エ）学校全体の落ち着き
「中学校教育の生命線は生徒指導である」特に「少人数指導による習熟度別学習」の実践以降、学校全体の生徒指導状況が驚くほどに落ち着いた。生徒と教員との信頼関係が深まった結果、生徒は落ち着いた環境の中で安心して学習をしている。
「少人数指導における習熟度別学習」は、生徒指導上でも、信頼関係を深める観点でも抜群の効果を持つものであることがわかった。



オ）保護者からの信頼の高まり

「学校が変わった」「先生方が熱心に指導してくれる」「先生方が生徒との信頼関係を大切にてくれている」等と保護者が教員に信頼を寄せてく

れている。「少人数指導における習熟度別学習」についても賛同が多数を占め、保護者の信頼の高まりとともに、生徒のがんばりが相乗効果となって学校に勢いと活力を与えてくれている。

②今後の課題

ア）教材開発の必要性
「少人数指導における習熟度別学習」を効果的に実施するためには、コース別（習熟度）に応じた教材の開発が必要である。
イ）指導と評価の一体化
診断的評価、形成的評価、総括的評価などの評価活動をさらなる工夫と充実、指導と評価の一体化に向けた研究の地道な継続が必要である。
ウ）コンプレックスや差別意識の払拭のために
「少人数指導における習熟度別学習」への誤解によって、生徒間のコンプレックス等が生じないように、今後とも広報活動を積極的に継続し、一人一人の個性や個人差を尊重し認めあう道徳教育にさらに力を入れていく。
エ）教員の指導力の向上
「少人数指導による習熟度別学習」を含め個に応じた学習指導を生かすためには、「一人一人の教員の指導力」が重要である。この研究を通して一人一人の教員の指導力をさらに向上させたい。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
□７～９学級　□１０～１２学級
□１３～１５学級　☑１６学級以上

【指導体制】　☑　少人数指導　☑　Ｔ．Ｔによる指導
□　その他

【研究教科】　☑　国語　☑　社会　☑　数学　☑　理科
☑　外国語　☑　音楽　☑　美術　☑技術・家庭
☑　保健体育　☑　その他（複式学級）

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑　有　□　無

【特色ある取組事例としての紹介したいポイント（都道府県教育委員会記入）】
1　少人数指導、習熟度の程度に応じた指導、教師の協力的な指導等の指導法について、教科、単元の特性によって使い分け、それぞれの指導方法のよさを生かしつつ、単元に応じて組み合わせ、活用をはかっている。
2　生徒指導上も個に応じた適切な指導が有効であり、生徒の学習への参加態度に変化が見られるようになった。
3　成果を生徒、保護者に対するアンケートを通して検証したり、テスト等による成果の検証を行い、生徒の変容を確認している。